

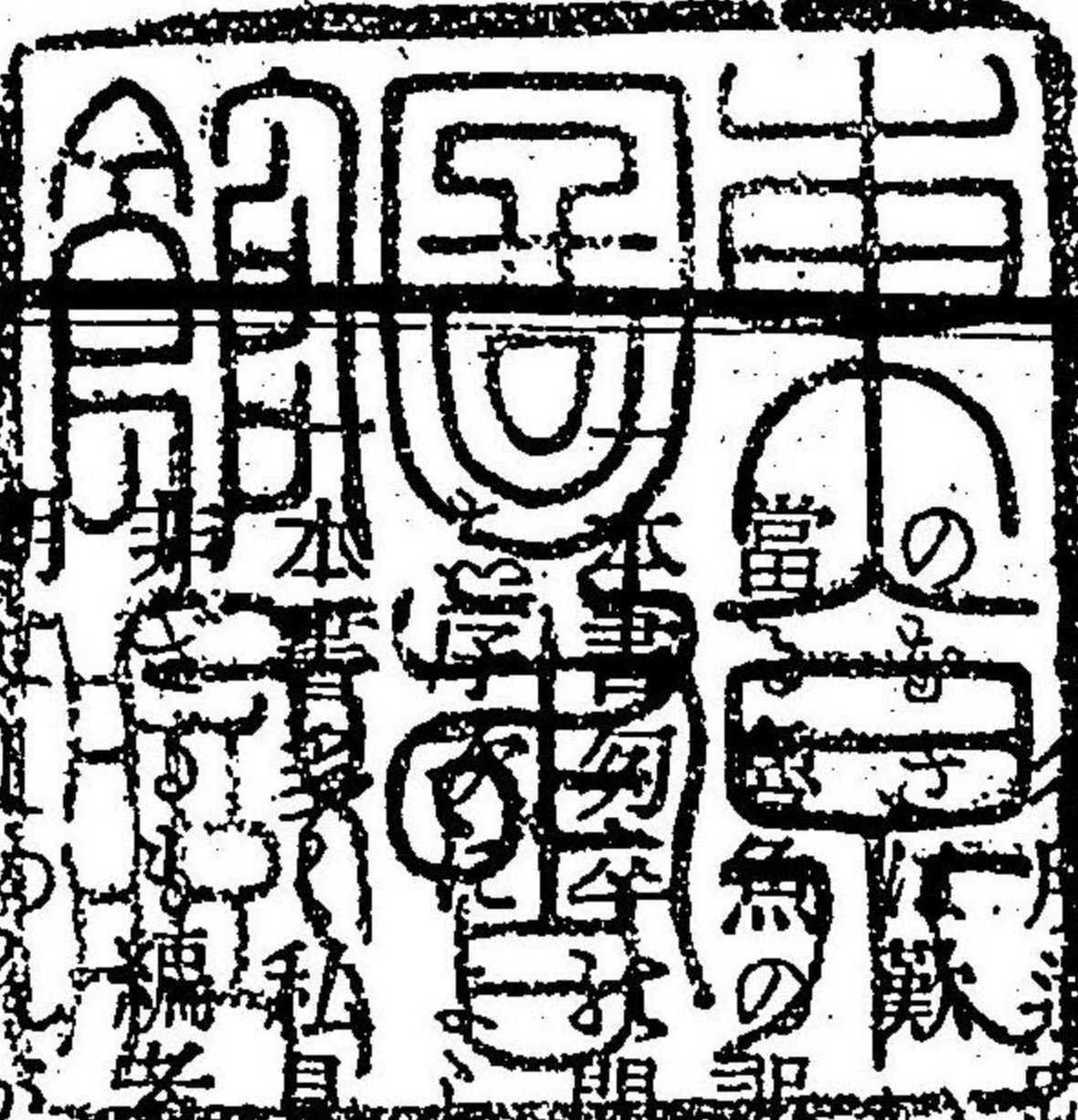
鴻城志

卷之上

斗6P 48

18-303

No. 541/1871



鴻城志

凡例

一山口ハ西國ハ一都會にして數百年前ハ實に繁榮を極



の多き他ハ地方に譲らば然る未だ之を  
しき事なり余菲才を顧みざ筆を執て自らこの大任に  
當る魚の誤素より免かれざる所なり

本書列年開に成る料を得るに隨つて録す未だ稿を定むるに違か  
ざるもの全くとくに係る

本書多私見を交へば時より原文に挿む敢て讀者の煩を知らざるに  
非ざるも編者が微意の存する所にして後生童蒙として之に據て發  
明せしめんが爲めなり

一本書に漏れしもれ及び誤れるものあらハ更に續編以て補すべし  
識者指教の勞を吝む勿れ

明治貳拾伍紀姑洗上浣

編者識

鴻城志

引用書目之一

爲人抄

伊勢物語山口抄

日本總國風土記

中國治亂記

温故雜誌

大內義隆記

和漢年契

太宰府天滿宮古實

筑紫紀行

能因歌枕

山口氏系圖

武備志

陰德太平記

瀨山詩集

本朝故事因緣集

琳聖太子記

温故雜誌

和訓栞

雍州府志

圖書編

禮記

舊事記

經國大典

古實明據

嚴島奉納万句集

日本書紀

登壇必究

大內樣御家根本記

大內氏實錄

和各類聚抄

吉田物語

築山屋形盛衰記

宇津山紀行

下松妙見社緣起

風土注進案

後太平記

延喜式  
蒼霞草  
雜書類  
新撰姓氏錄  
古文書

荏柄天神緣起  
最明寺殿入國記  
牛馬問答  
先代舊事本紀

秋の寢覺(自著)  
殘太平記  
諸社覽  
高橋氏雜纂

鴻城志卷之上目次

(一) 名稱  
(三) 區域  
(五) 寒暑  
(七) 言語  
(九) 大内氏祀祖  
(一一) 細川幽齋  
(一三) 可易  
(一五) 福部の祀  
(一七) 馬塚  
(一九) 矢田及仲河  
(二一) 柳の水  
(二三) 十景の詩

(三) 位置  
(四) 地形  
(六) 人情  
(八) 歴史  
(一〇) 大内氏世系  
(一二) 宗祇法師  
(一四) 今春の塚  
(一六) 大塚  
(一八) 宇野令  
(二〇) 築山  
(二二) 大内畑の櫻  
(二四) 湯田温泉(十景の一)

- |               |                 |
|---------------|-----------------|
| (二五) 鰐石(十景の一) | (二六) 猿林(全上)     |
| (二七) 虹橋(全上)   | (二八) 梅峯瀧(全上)    |
| (二九) 長谷(全上)   | (三〇) 清水寺(全上)    |
| (三一) 氷上(全上)   | (三二) 南明山乘福寺(全上) |
| (三三) 象頭山(全上)  | (三四) 鼓沢瀑        |
| (三五) 鳴瀑       | (三六) 不見ヶ溪       |
| (三七) 四王寺の古跡   | (三八) 鱒山の關       |
| (三九) 潮境       | (四〇) 石碑         |
| (四一) 法界寺の額    | (四二) 古代の建築物     |
| (四三) 常妙寺の唐門   |                 |

鴻城志卷之上

佐々木宇一編

(一) 名稱

鴻城、山口曰、或雅名にしてまた仁壁の里。七野の里。朝倉の郷とも呼ぶ。山口の名は往古より遠く海外に聞へて經國大典日本國記に

大内氏、多々良氏。世居三州大内縣山口。倭訓也。管三周防長門豐前筑前四州之地云々

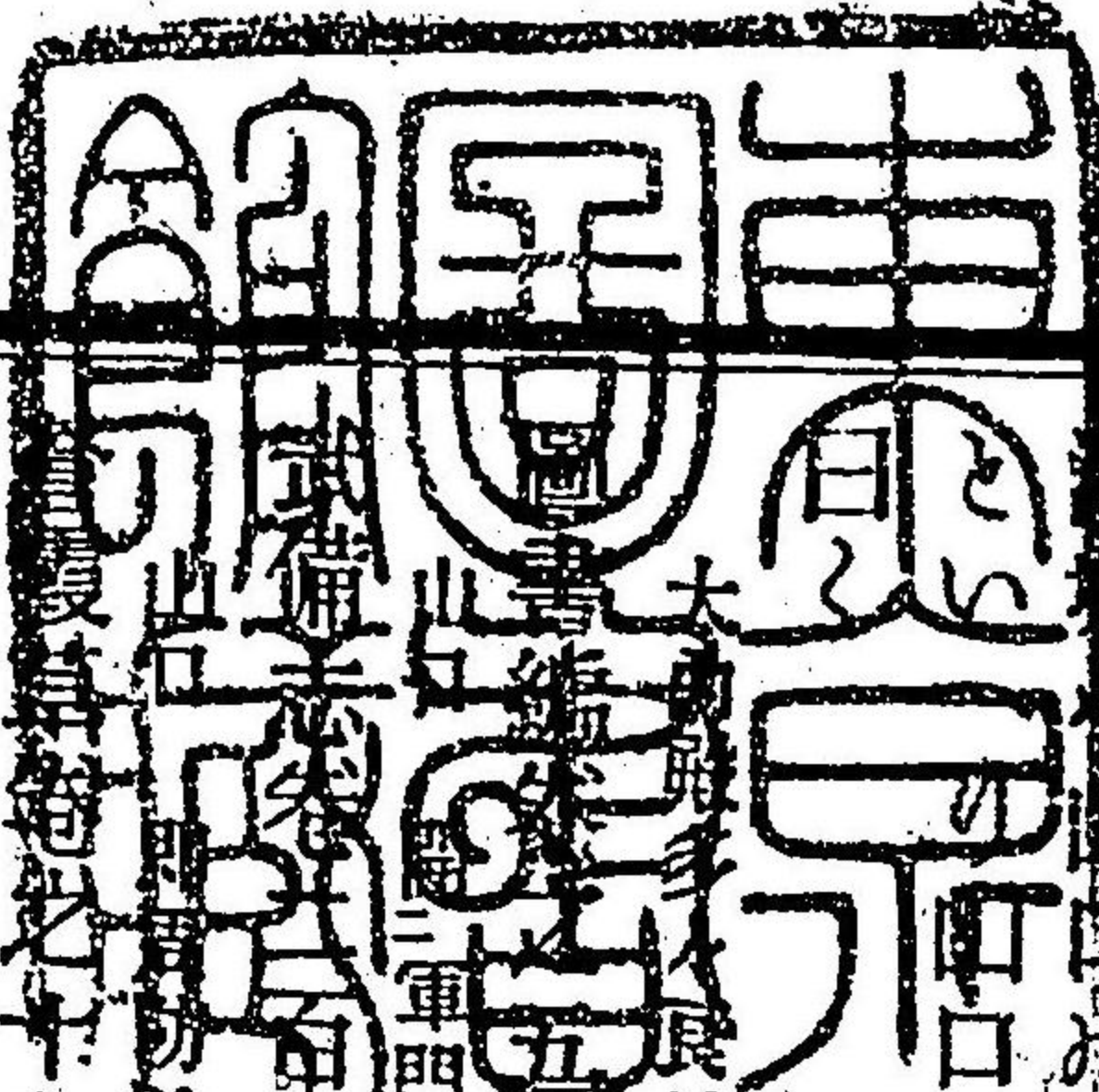
日本國圖周防州之内曰く

武備志卷之二十九曰く

山口、周防防羊馬窟諸

安藝石見之西爲三山口谷國。即古之周防州也。山口之西爲三長門。關渡在焉。登壇必究東倭一卷倭國事略に曰く

安藝石見之西爲三山口國。即古之周防州也。山口之西爲三長門。山口の名地たる豈に蔽ふ可けんや



(二) 位置

北緯三十四度十一分。西經八度十九分に位し周防國吉敷郡に屬して東は全國佐波郡に南は本郡南部諸村に西は長門國厚狹郡に北は全國阿武郡に界し四面山岳を以て圍繞す

(三) 區域

山口と云へる地は區域得て確からずと雖とも正保四年毛利氏宗藩領を十八宰判を分ちしとき吉敷郡北部諸村即ち今の山口町。上下宇野令村。宮野村。仁保村。小鯖村。大内村。平川村。矢原朝田村。吉敷村を總轄して山口宰判と定めたる今之に據る

(四) 地形

山口は其名の如く連山圍繞して四塞の固め密からざる而して昔時平安城の風流を摸す宜かり雍州府志に曰く

比叡山延曆寺。凡平安城四邊之山悉向內。斯山獨向外。悉內繞則無出氣。不成京都。猶中華金陵牛首山之別背金陵(今の)也。

とこの地も亦四面の山悉く内に向ひて獨り氷上山のみ背く。而して湯田より黒川を経て小郡に至る恰も京都より鳥羽竹田を経て伏見に下るの風趣あり。古熊の邊の。東山蹴上の清水大日山は勝景に似たる。松茸の風味の絶殊ある。鰯石川は鮎の桂川の産に異らざる。螢の宇治に劣らざる。廣澤寺山の松皮付は儘用材をすべきハ伏見稻荷山の産に勝れる。況や地形の幽邃深遠なる恰も玄の玄なるものと云はんか先儒言へらく四神相應の地ありと古熊川東に流れて角亢氏房心尾箕の七宿備はり恰も龍の蟠るが如く。小郡街道西に杏として奎婁胃。昴畢。觜。參。象。虎の形を爲し。鰯石の邊平原茫乎として南方の七宿。井。鬼。抑。星。張。翼。軫。は宛然たる鳥雀なれば朱雀み名つく可く。大藏。鳳。麟の諸山北に聳へて斗。牛。女。虛。危。室。壁。七宿。龜。蛇の象に彷彿たれば玄武にたとふ可し爾雅釋天の疏に曰く龍と虎は南を首にし尾は北に比鳥と龜ハ西と首とし尾を東にすとの地悉く之に叶ふ豈妙からざるや

(五) 寒暑

山間の地なるを以て寒冷なるを免かれど故に其温度ハ炎暑も華氏驗  
温器九十五度ヲ超へど嚴寒は全二十七度に降ることあり

(六) 人情

概するに淳朴にして信義厚く事に蒞て勇氣物に處して其功を奏せ  
ざるかし然るに最明寺入道入國記に曰く

此郡の人の健氣なきとも義理少し

と噫これ皮相の見かるか。將に當時或は然りしか。

(七) 言語

昔時洛陽に擬してより月卿雲客常に交通して言語も亦優雅を移せり  
而して大内義隆の奇癖ある一時は殿中主として韓語を用ゐしめた  
ると云ふ然れども變遷久して今は所謂中國語を通じ唯子女に至つて  
多小訛言あるを免かれど俗謠あり以て證せす

訛言 山口よりば 彼の 此 君 何言 我  
あのそに このそ かのしや どのかちぢり うら

不知 姉 兄 塵 勿慮 否々  
しらん ねーまに にーまに こーま はばへさんすあ いけんや  
汚穢 可厭 肩摩 氣毒  
何ふとくあいに よぎさけあい せんぎんごんごー ねたいおたい  
歸ラハ 母 告 滅法 落  
いんざら れかゝに いふちやげる やとくも 何ろけた 國々ま  
長州防州

(八) 歴史

人民移住の創始詳あるを得どと雖また舊地たるを疑はど吉敷郡古へ  
吉之岐國と稱ひ成務天皇即位四年國造を定む先代舊事本紀國造本紀  
に曰く

波久岐ノ國造

瑞籙朝阿岐國造同祖金波佐彦孫豐玉根命定賜國造

と而して鼈頭舊事紀卷五の頭書に曰く

波久岐可作與之岐疑今周防國吉敷郡與之

天慶三年伊豫掾藤原純友寇す

正平年中大内弘世大内村より起り山口氏を滅し移て山口町大字上立

小路に居り世々近國を領すこゝ時最も繁榮を極め一都會を爲したり  
弘治三年大内氏亡るの後毛利氏代り領す  
明治維新制度釐革縣廳をこゝに置いて周防長門を二國を管し文華殆ん  
ど舊に復せ

(九) 大内氏代祖

大内氏は其先百濟の皇族にして其大祖は餘映王より出づ。餘映。毘を  
生み。毘。慶を生み。慶。牟都を生み。牟都。牟大を生み。牟大。隆を生み。隆。  
明を生み。明。淹を生み。淹。昌を生み。昌。聖明を生む。聖明を第二子と琳  
聖太子と稱し皇朝に歸化す之を大内氏の祖とす

百濟王聖明の第二子琳聖推古天皇即位十九年辛未歲投化す其船周防國佐波郡多々良  
濱に泊たりこゝ一日滞在し難波に上り荒陵四天王寺にて聖德太子に謁してのち周  
防に下り大内縣に居る

雜書類に曰く

推古天皇十九年琳聖太子來朝と

吉田物語卷五大内家由來の條に曰く

東夷ニ三韓アリ(中略)百濟國ト稱ス帝王ノ姓ハ余也然ハ餘障王第三ノ太子琳聖日本  
百濟ノ和ヲ結フヘキタメ爲シ質渡海、日本人王三十四代 推古十九年辛未三月朔日御  
船周防國多々良ノ濱ニ着岸有之云々

温故雜誌八に曰く

人皇三十四代推古天皇御宇十九年辛未來朝定居元年ニ當テ百濟國ノ年号ナリ  
高橋有文曰ク定居ノ年号ヲ百濟ノ年号トハ證アリヤ日本ノ偽年号ト築山屋形盛衰記  
ニモ論シ貝原氏ノ偽号考ニモアリ和漢年契ノ凡例ニモ異國ノ年号ニハ非ラズト言ヘ  
ルオヤ

後太平記卷廿八及び築山屋形盛衰記に曰く

大内氏ノ元祖琳聖太子ハ百濟國馬韓ノ皇帝齊明王第三ノ王子ナリ靈夢ニヨリテ本邦  
ノ聖德太子ニ謁セント欲シ玉ヒ本邦ノ定居元年辛未ノ年三月二日周防國多々良濱ニ  
着セ玉フ國司急ギ京都ニ至テ此旨ヲ奏聞セシ所ニ無シ程勅使下テ 推古天皇宣命ニヨ  
リ長門國大内縣ニ權リニ王宮ヲ立テ太子ヲ移シ奉ル數代此所ニ年ヲ經サセ玉フ云々  
大内様御家根本記に曰く

百濟國聖明王第三子琳聖太子と申せしは人皇三十四代 推古天皇定居元年日本周防



國多々良濱を來朝し給ひて大内寺に居住ありし云々  
爲人抄卷九に曰く

周防國佐波郡鞠生ノ浦多々良ノ濱へ上ラセ給ヒ云々

大内義隆記よ曰く

多々良濱へ定居二年ニ來朝シ大内ニ居住シ玉ヒ云々

周防國風土記に曰く

豐御食炊屋姫命二十年琳聖宿契相投ニ下周防國ニ住ニ大内里ニ

琳聖太子記(瑠璃光寺藏)に曰く

琳聖太子は聖德太子の四十歳時日本來朝とあり聖德太子は敏達天皇二癸巳正月朔  
日誕生推古天皇廿九年二月廿二日薨四十九と本朝皇胤運録の人皇三十二代用明天皇  
の皇子聖德太子に傳に見へたり

殘太平記第十二及和漢合運録に曰く

琳聖太子ハ推古天皇五年丁巳三月二日卿相雲客殿上人百司百官百餘人ヲ相供シ周防  
國多々良濱ニ着玉ッ

新撰姓氏錄下卷に曰く

多々良公 出自御間名主爾利久牟王也云々欽明御世投化

中國治乱記に曰く

百濟國爾利久牟王ノ御子琳聖太子日本欽明天皇ノ御時日本ニ渡リ云々

夫斯れ如く孰れか據るべきを知らず而して琳聖の名正史に載するも  
のちし日本書紀欽明の卷に曰く

十六年春二月百濟王ノ子餘昌遣ニ王ノ子惠王子惠者威  
德王ノ弟也曰聖明王爲レ賊見レ殺十五年爲ニ新  
羅ニ所レ殺故 天皇  
聞而傷恨

和漢年契よ曰く

欽明天皇十六年乙亥百濟餘昌使ニ其弟來告レ哀

之よ因て推考するよ百濟王子惠は新羅の爲めに父聖明を擒よせられ  
終に殺さる皇朝ハ曾て和親かるべ以て來て哀を告く未だ援軍を得ず  
故に辭して京を去るも恃む所なきを以て再び船を多々良濱に繫き本  
國の動靜を窺ふれ間光陰隙駒の如く身老て終に歸化の人とかりしよ  
は非ざるか琳聖は惠の謚號よハ非ざるか左れハ來朝を欽明に朝とし  
歸化ハ推古の朝とす據る所あるに似たり然れとも先人未たこきを言  
はず暫らく憶説を記して識者の再考を俟つ

(一〇) 大内氏世系

大内氏始稱多々良氏一姓宿禰後作朝臣

○琳聖太子

舒明天皇三年辛卯七月六日薨常州宇布山口氏系天智天皇六年丁卯六月廿一日薨社緣起

琳龍太子

治務十九年葬大内畑○高橋有文曰諸家大系圖正恒爲琳聖太子七代孫一蓋因是琳龍以下五代後人所僞作也矣今從之

阿戸太子

世農太子

世阿太子

阿津太子

二世正恒

初賜多々良氏一  
或云正恒後數世不傳天慶年中有藤根者冒大内氏

三世藤根

四世宗範

五世茂村

六世弘真

或茂村 初保盛 或以保盛爲茂村子  
或弘真 宮野郷本主

七世貞長

八世貞成

九世盛房

十世弘盛

十一世滿盛

十二世弘成

十三世弘貞

十四世弘家

十五世重弘

十六世弘幸

十七世弘世

初貞盛○右田氏祖 陶氏祖 來原氏祖 吉敷氏祖

周防介 大内介○問田氏祖 鷺頭氏祖 益成氏祖 野田氏祖

周防權介 大内介○鰐石氏祖 仁戸田氏祖○元曆年中有功平家遺討賜長門國

周防權介 大内介○安富氏祖○元曆年中屬源氏有勳功

周防權介 周防介 大内介 長門守 從五位下○黒川氏祖 江木氏祖

周防介 大内介 從五位下○末武氏祖●寛元二年九月十八日卒 法名

本州別駕覺淨大禪定門

矢田太郎 大宮太郎 周防權介 周防介 大内介正六位上○矢田氏祖

●正家二年三月廿八日卒 法名大宮寺殿本州大別駕圓淨大禪定門

周防權介 大内介 正六位上 六波羅評定衆●元應二年三月六日卒葬

御堀村乘福寺一法名乘福寺殿本州大別駕道山淨惠大禪定門

周防權介 大内氏 正六位上 入道寒巖 全妙殿●文和三年三月六日

卒葬上宇野令村古熊一法名永興寺殿(或永福寺殿)本州別駕寒巖妙殿

大禪定門

孫太郎 周防權介 大内介 修理大夫 從五位下 入道玄峯 全道階

○冷泉氏祖○周防長門石見守護●康暦二年十一月十五日卒五十六歲葬

世十八 義弘

御堀村正壽院法名正壽院殿玄峯道階大居士

孫太郎 周防介 大内介 左京權大夫 從四位上 入道道實 全義弘  
○柿並氏祖 高石氏祖◎周防長門石見豐前和泉紀伊大和守護●應永六年十二月廿一日於泉州堺討死年四十四葬上宇野令村香積寺 法名香積寺殿秀山實公(或秀山佛真或梅窓道實)

世十九 弘茂

實弘世子 新介 大内介◎周防長門守護●應永八年十二月廿九日(或十月十日)戰死長門國豐浦郡下山法名真休院殿日庵淨永

世二十 盛見

實弘世子 六郎 大内介 周防守 左京大夫 從四位下 從四位上  
散位 沙彌 大先 德雄 初道雄◎周防長門豐前筑前守護●永享三年六月廿八日戰死筑前國志摩郡深江五十六歲葬上宇野令村國清寺 法名國清寺殿大先德雄大禪定門

世廿一 持盛

實弘世子 孫太郎 新介 正六位上 散位●永享五年四月八日戰死豐前國篠崎葬上宇野令村觀音寺 法名勝音寺殿(或觀音寺殿) 芳林道繼

世廿二 持世

實弘世子 九郎 大内氏 刑部少輔 兵部大輔 左京大夫 修理大夫 從五位下 從四位下 從四位上◎周防長門豐前筑前守護●嘉吉元年七月廿八日卒葬宮野村澄泉寺 法名澄泉寺殿(或長泉寺) 道嚴正弘大禪定門

世廿三 教弘

實盛見子 六郎 周防權介 新介 周防介 大内介 周防權守 左京大夫 大膳大夫 掃部頭 從五位下 正五位下 從四位下 贈三位

世廿四 政弘

号築山殿 周防長門豐前筑前守護●寬正六年九月三日卒豫州興居島 年四十六葬小鯖村關雲寺 法名關雲寺殿大基教弘大禪定門  
龜童丸 太郎 周防介 新介 大内介 周防權守 左京大夫 從四位下 從四位上 贈三位◎周防長門豐前筑前守護●明應四年九月十八日卒享年五十葬上宇野令村法泉寺 法名法泉寺殿直翁真正居士

世廿五 義興

龜童丸 六郎 周防權介 大内介 左京大夫 正六位上 從四位下 從四位上 從三位 管領代◎周防長門豐前筑前安藝石見守護●享祿元年十二月廿日薨五十二歲葬中尾村凌雲寺 法名凌雲寺殿傑叟義秀大居士

世廿六 義隆

龜童丸 周防介 大内介 左京大夫 左兵衛權佐 兵部權大輔 伊豫介 太宰大貳 兵部卿 侍從 從五位下 從五位上 正五位下 正五位上 從四位下 從四位上 從三位 從二位◎周防長門豐前筑前安藝石見守護●天文二十年九月朔日自殺長州大津郡深川大寧寺 享年四十五葬全寺 法名龍福寺殿瑞雲珠天大居士

義隆 義長

實大友義鑑二男 映英 從五位下 左京大夫●弘治二年四月二日自殺

豊浦郡且山長福寺二享年十八葬三全寺一 法名春輝院春光龍甫

(一一) 細川幽齋

天正十五年、從二位細川幽齋法師之旨、豊臣公の立花陳見舞として但州田邊より下向し途次七月七日舟木より山口に來り

七夕の別れ袖にくらへ見と露をからうす旅の衣手 立 旨

九日本國寺よて

もる月も今一しほの木の間のみ

十日宮市へ趣けり

(一二) 宗祇法師

連歌師宗祇は文明延徳の兩度山口に來りしもの筑紫紀行に

文明十二の六月の始め獨防山口といふに下りぬ云々

宗長宇津山紀行よ

西國へも宗祇同宿して大内左京京兆のあたりにも一年はあり居りて云々

伊勢物語山口抄の跋に宗祇自筆にて

此一冊は延徳の初防州山口にして此物語の講釋の後云々

其宿所ハ蓋本國寺あるべし

(一三) 可 易

本國寺の僧に志て久本院日宋上人と稱し天正文錄慶長元和の頃の人かり連歌に達識にして法眼紹巴、法橋昌叱、立仲等と交り好し藝州殿島奉納法樂万句の六千句第一よ

芦原やまつまる波よ萩の聲

可 易

全じく十千句第六に

年くくの木立もまけし花盛

同

(一四) 今春の塚

小鯖村字境村よ在り土俗豆腐を供して齒痛や平癒を祈る其何人の靈たるを知らざ或はいふ大内氏の頃猿樂の師今春この地に來り終に起たざと未だ考證を得ざ

(一五) 福部の祀

北野小路の裏にあり毎年六月廿六日を祭日として參詣の人群を爲せり俗に傳ふ祀る所の福部童子は菅原道真公の子息にして公を尋ねて九國に趣かんとしこの地にて痢疾病て夭死すと、洛陽北野神社の末社に福部社あり諸社一覽卷北野社傳より曰く

世人言ニ執奏神ニ是也

荏柄天神縁起に曰く

菅公の從者あり

雍州府志卷三北野社傳に曰く

紅梅殿號ニ福部大明神ニ或謂ニ執奏神ニ也未知ニ祭ニ何神ニ

又曰く

謂ニ菅公眷屬之神ニ未知ニ爲ニ何神ニ也

太宰府天滿宮古實卷上に曰く

菅公は年久しく住馴れ給ひし紅梅殿を立出させ給ひしかは云々

古實明據卷十六に曰く

菅家の本御臺は櫻戸御前といぬ其外に紅梅殿老松殿連二人の妾あり紅梅殿屋敷は今西洞院高辻にて今菅大臣といぬ天神の社の並びの地あり云々

今思ふに當地より來られしはこの紅梅殿より産れ玉ひしものよて其名を呼ばずたゞ福部殿と稱へしにハ非ざるか

(一六) 大塚

長野村字大塚に在り享保十年二月廿九日この地を墾て高六尺徑二尺許の石龕を出す時に益田氏の臣安富某の母に憑りて云ふ吾ハ往古仁保津の城主にてありけるも八百年前ハ戰に利を失ひ弓折れ矢盡きて空しく郊原に枯骨とかりぬ云々と婦女子の狂言採るも足らざれとも假りに史に據れハ凡七百廿六年前即ち天慶三年純友の亂ありて此地も其寇する所とされり或ハこれを謂へる乎

(一七) 馬塔

御堀村の西門前といへる地は在り古昔死馬を埋めし地なりといふ禮の檀弓よ

徹帷不棄爲埋馬也

また

路馬死埋之以帷

とありて往昔は和漢とを此制ありしか

(一八) 宇野令

古くハ宇努と書たり和名類聚鈔卷八吉敷郡の部に出づ以て證とすべし又日本總國風土記吉敷郡の部よ曰く

宇努卿 出良材佳菓藥草等

を知るべし古來著名地たるを

(一九) 矢田及仲河

矢田古ハ八田と書し仲河は今御堀村の小字とある共に源順が和名類聚抄卷五吉敷郡の部に出づ

(二〇) 築山

山口上堅小路

今の八坂神社及び築山神社のある所にして古へ大内氏別業の地なりといふ大内教弘築山殿を稱す蓋其築く所からん老葉集(原本は厚狭郡吉田の安部氏所藏すといぬ)に連歌師宗祇法師の句あり

西國に下りしとき大内京兆(大内政弘)つき山よて一座興行の時此所のさまをつこうまつるべきよし所望侍しに

池ハ海梢はあつの深山かか

宗祇

大内京兆の亭の月次に

白雲のたてるやいつこ花盛り

同

色深き木の葉の庭ハ塵もなし

同

一とせを見るは氷の鏡かか

同

大内京兆亭にて神無月の月次に發句すべきよし侍しよ其夜雪のふりける曉にて發句はいあふかと申されしあしたよ

けさ見るやあらしに消し夜の雪

宗祇

とこの泉水は源を一の坂魚切より分派し餘流を居館の堀に及ぼし末は飯田町を経て後川に注ぐ、海をなすの泉水山を作るの樹木以て當時を追想するに足る

前面ハ巨石を疊み土を盛りて圍み一見して其宏大あるに驚き舊墟なることを知らしめしが文久年中毛利氏萩より來りて此石を用ひて城を築たり然れども巨石運搬に堪へざれば悉く數個に分壘しふりと云ふ

(二二) 柳の水

上宇野令村字法泉寺村にあり其清きことや京師の柳の水に異ならざ全しく名づかし所以かり昔時足利義植將軍江良の僑居のころ日常之を用ひて陸羽を樂しむるや茶ハ祛宿疾換骨輕身氣力精健眉髮紺緑の功ありや聞く水もまた擇ぶべき哉

(二三) 大内畑の櫻

疇昔虎の尾に大内櫻とて周圍壹丈高さ貳間、六間四方に跨る大樹あり

りて春日花下管弦の音晝夜を絶もざりしがいつの頃にか枯れ果てたりといふ

々ふの日を盛りと句へ櫻花幾春毎の思ひ出にせん 菊子

(二四) 十景の詩

これ明人可庸の賦す所かり可庸姓は趙名は秩可庸は其號かり圖書編日本考に曰く

日本古倭奴國。云々。洪武二年倭寇山東。云々。三年寇山東。轉掠浙東福建旁海諸郡。是上使下萊州府同知趙秩。賜三璽書。論其王良懷。云々。

良懷であるは後醍醐天皇第九皇子懷良親王からん趙秩は皇朝建徳元年に使として來れり其山口に來りしことハ史に見すとといへとも其詩あれハ更な疑ふ可くもあらず

(二四) 湯田の温泉

下宇野令村に在り陳迹の好事に供する能はざるも以て鴻城の榮を増

すよ足る其起原ハ口牌ニ傳ふるも一から未だ證すべきなし境内  
に薬師堂あり神官之を司る思ふに延喜の神名帳に伊豫ハ温泉に湯神  
社ありて少彦名命を祀れり命ハ醫藥の祖かれは薬師をいぬへし醫  
を醫師といへるもこれに因れり然るを薬師といへは佛ニ限れる如く  
思ふものあるへきも其祭を古くより神職の司れるを以てこの薬師も  
命を祀るること論かかへし

十景ハ一にして可庸の詩あり温泉春色と題す

山川秀孕陰陽灰。天地鑄成造化爐。誰献玉鸕天寶後。派分春色到  
東隅

海東諸國記ニ有温泉といへるもの蓋これを謂乎

(二五) 鰐石

俗に重ぬ岩と稱ハ鰐石川の邊に在る奇巖屹立す十景の一にして鰐  
石生雲と題し可庸ハ詩あり

禹門點額不成龍。玉立溪流任激衝。自是烟霧釣鰐處。幾重苔蘚

白雲封。

瀨山詩集卷二に詩あり春日遊鰐水と題す

鰐川風物好。遊賞愛佳辰。花送遠山色。楊分兩岸春。清漣行洗耳。  
巨石坐垂綸。晚值一漁父。長歌對我真。

汀洲新雨後。百里弄春晴。歸雁入霞沒。浮鷗受浪輕。未爲乘海  
計。偶似浴沂情。風詠相携處。不知西月傾。

疑是武陵口。桃花兩岸春。茅茨遠澗迴。雞犬隔雲頻。野老驚看客  
村醪留醉人。拂衣長此約。莫使失來津。

この邊螢の名所にして之を宇治川に比し騷人群を爲して之を賞し殊  
に陰曆四月廿日ハ螢合戦の縁日として見物の人夥し

(二六) 猿林

上宇野令村古熊に在り元永福寺の境内あり十景の一として猿林曉月  
と題す

曉色初分天雨霜。凄々殘月伴珊瑚。山人一去無消息。驚起哀猿空



斷腸。

築山屋形盛衰記卷下雜品に曰く

或曰猿林ハ山口古熊村今天神ノ邊ニ猿田ト云地五畝程アリ昔猿ノ飼料ト云

(二七) 虹橋

一代坂川ニ架シ菽街道に在リ小なりと雖とも兩端山に接するを以て奇とす十景の一にして可庸の詩あり虹橋跨水と題ス

盤浸登玉接東流。鞭石尋仙興未休。借得紫虹飛欲去。扶桑何處是三洲。

(二八) 梅峯瀧

上宇野令村字法泉寺村に在りて傍に銀杏の大樹あり故にイテフガ瀧とも稱を直下六丈として幅貳間あり碎沫以て水簾を垂れ夏日納涼の好地と云十景の一にして梅峯飛瀑と題す

銀河誰挽玉龍翔。白練懸岸百尺長。噴向梅梢雨花落。濺人珠玉無清香。

句中雨花の佛語あるものこの地に法泉寺といへる寺ありて其境致をきハかり因云法泉寺ハ大内政弘の菩提寺かれとも其以前よりこの寺のありしこと先儒の既論する所あり

(二九) 長谷

宮野下村みあり泊瀬寺の舊趾よし陰徳太平記卷十九に曰く

願ハハ此モ補陀落ヤ泊瀬ノ寺ノ奥深ク古川ノ邊ニ二本アル杉立門ヲシルベニテト即チコノ地ナリ十景ノ一ニシテ長谷晴嵐ト題ス

非烟非霧翠光迷。谷口雲連日影低。都道嵯峨山色似。依稀疑是洛陽西。

牛馬問答卷二に曰く

長谷川長谷寺などといふ和訓長谷の字にはハセレ訓はなし是は大和の初瀬に長谷寺あり人皆字音をいはせハセ寺と通稱せり土俗に言葉世々に傳はると終に長谷の字ハセの訓を附す

と敢て好事家の爲めに長谷の字訓を辨す

(三〇) 清水寺

宮野下村に在り陰徳太平記卷十九に曰く

清水寺ノ春ノ晚入相ノ鐘ニ散ル花ハ空ニシラス雪降テ水ナキ庭ニ波ヅ立ラン  
残太平記大内義隆王法修行の條に曰く

春ハ清水寺ノ花見。秋ハ法泉寺ノ紅葉。夏ハ鰐石川ノ螢。冬ハ氷上山ノ雪見日々ノ遊  
興暇ナクツ聞ヘケル弥生七日清水寺ノ花見ニ皆明寺僧正堯圓ノ歌ニ

名残り深き老成心を亦見んと思はぬ花の夕榮の色

次ニ太宰ノ義隆卿

忘れざハ亦も來て見よ唐土のよしや吉野の花の名残りを

十景の一にして清水晚鐘と題す

暮雲疎雨欲消魂。獨立西風半掩門。大内峯頭清水寺。鐘聲驚客

幾黄昏。

(三二) 氷上

御堀村の内の地名にして御堀川流れて山水明媚かり十景の一にして

氷上滌暑と題す

光凝山罈銀千疊。寒色清人絕鬱蒸。異國更無河朔飲。煩襟每憶玉

稜層。

(三三) 南明山乘福寺

御堀村に在り開山と鏡空といふ當時清拙和尚來朝してこゝに寓す其  
空よ與ふるの詩あり

歸雲瑞氣靄門庭。間出優曇異世馨。昨夜周防千峯雪。獨看乘福一  
峰青。

十景の一にして南明秋興と題す

金玉樓臺擁翠微。南山秋色兩交輝。西風落葉雲門靜。暮雨欲來僧  
未歸。

當寺は大内氏の祖琳聖太子駐足の地として其名高し築山屋形盛衰記  
卷下に曰く

毛利家ニ至リ黒田如水ノ望ニ依テ御堀ノ乘福寺ヲ破テ福岡ニ建之其跡ヘ今ノ寺立  
テリ三重ノ塔殘リテ數年ノ後燒失ス右ノ寺ノ替リノ意ニテカ萩御城築ノ時ニ黒田ヨ  
リ船三艘瓦ヲ贈ラル今モ大ナル古瓦殘リ在ト云

(三三) 象頭山

御堀村に在り俗よ長者山と稱す十景の一にして象頭積雪と題は  
夜來積雪象頭峯。老幼溪山變玉龍。便欲乘龍朝帝闕。瑤階瓊宇  
更重々。

(三四) 鼓の瀑

吉敷村鼓ヶ嶽の麓ある龍藏寺の傍に在り大に奇韻を奏は能因歌枕に  
出つ高二十尺夏天避暑の勝地とす烏丸光榮公の歌あり

名よ高き鼓か岳をうち見れハ調とあハぬ松風の音

古人十二膝覽を名つく曰く蠅竜洞、曰く竜門瀑、曰く指月嶺、曰く天  
人橋、曰く羅崙、曰く爲樂樓、曰く鼓殿丘、曰く飲竜澗、曰く懲惡溪、曰  
く雨花臺、曰く風臨亭、曰く懲咲石、也

(三五) 鳴瀧

小鯖村泰雲寺に傍に在り水勢激々して其響遠く聞ゆ故に鳴瀧の稱あ  
りと或云大内氏京都を摸せしやき洛陽の名をうつしたるものなりと  
高三十尺幅之に叶ひ迸水巨磐を奔り石底よ激し以て奇觀を存す

陰徳太平記卷十九に曰く

關雲寺後ノ瀧ノ響ハ成ニ五時説法ノ聲ニ汲人洗ニ遂心  
と即ちこれなり風蘆坊の記に曰く

世に鳴瀧とひきし勝地を見せんとあるその麓ある朝水子の信にひりきつゝ名にお  
ふ昆盧の高峰を目として松柏の木の間をくたり剣巖の角と傳ひ老脚辛うして終に瀧  
れ下に至る誠や其名にたかはす遙の岩間より漲り落ること三折にしと飛走る水玉は  
磔を欺り吹散る水煙は霧のと怪しやき其風色と全く仙境に異あらを爰ふ此傳手あり  
てうくる奇景に眼と悦はしむるも是また斗級の一徳といふべし

岩に碎けくしてハ鳴る瀧涼し

風蘆坊

(三六) 不見ヶ溪

乘福寺の境内山にあり往昔五丈二尺有餘の蛟住て夜かく里よ出て  
兒女を奪り食ひたるに元曆年中大内弘盛數百の弓矢に達者を遣はし  
之を殺さしむ蛟ハ「ミツチ」と訓す即ち「チ」を略してミツカ溪といひ  
しをいつしが今の字に誤り傳へたる蛟の頭とて今尙乘福寺よ存す本

朝故事因縁集卷之五に曰く

天文ノ始周防國氷上山ニ大蛇アリト僧侶騒動ス人民集リ搜出シ捕レ之先山甲也(中略) 寺邊ニ畜レ之或時石玉ヲ吐ク是亦奇石ナリ北長尊星ノ祭ニ備フ

和訓栞不倍之部に曰く

天文の頃周防の氷上山に穿山甲出くある時石玉を吐といひ傳ふる皆谿答(たゝら) ばさら)の類あり

(三七) 四王寺の古跡

長野村八幡宮の東ある山中に在り高四間横三間餘の大石に「南無當 來導師彌勒慈尊」の字を彫す頗る古体にして好古家の一見すへきと のかまをす大門の跡下馬石今も存す

或云く延喜式に長門國四王寺とあるもの該當するまいあらざるかと 然れども長門國豊浦郡は四王寺山あり猶とく考ふべし

(三八) 鯖山の關

天正の頃小鯖村字鯖山は關所を置きしといふ今其何れの地かりしや

を知らざ

(三九) 潮 境

朝田村と小郡村の間にとく土人云ふ往昔この地まで潮の満ちし名の 残れるかりと

(四〇) 石 碑

小鯖村八幡宮の馬場鳥居の側に表石あり高五尺許左の文字を彫す其 何の爲めに設けたるを辨せざ

僧 俊

貞治六年丁未九月廿六日

敬 白

石 碑

(四一) 法界寺の額

文は曰く「翠竹園」とこれ大内氏長山別業の額なるを今の所に遷せし もれにて相良遠江守の筆と成れりと傳ふ

(四二) 古代の建築

平井村の平清水八幡宮は實に千八十餘年前  
平城天皇大同四年の建築よして檜の割たるを其儘削りもせて粉色を  
施し朱扉梁間の彫刻見るも其懷古の情自ら起らざるを因云當宮は  
皇朝八幡宮の創始にして京都石清水八幡宮も之より五十一年の後に  
祀れりといふ豈稀代の事ならずや

(四三) 常妙寺の唐門

法華宗常妙寺は古へ常蓮寺と稱ひ征夷將軍足利尊氏の祈願所として  
建立する所にして其唐門は當時の遺物なりと云ふ扉に記す文に曰く  
爲常蓮精舎永代祈願所建立者也

觀應元庚寅三月吉日

尊氏

然れとも尊氏は法華信者あることを聞かひ況んや其菩提寺等持院ハ  
禪宗あるをや敢て識者の考を俟つ

鴻城志卷之上終

明治廿五年四月十五日印刷

明治廿五年四月十六日出版

山口縣吉敷郡山口町大字野田町第三拾番屋敷

發行兼編輯人

佐々木宇一

山口縣吉敷郡山口町大字久保小路町第二番屋敷

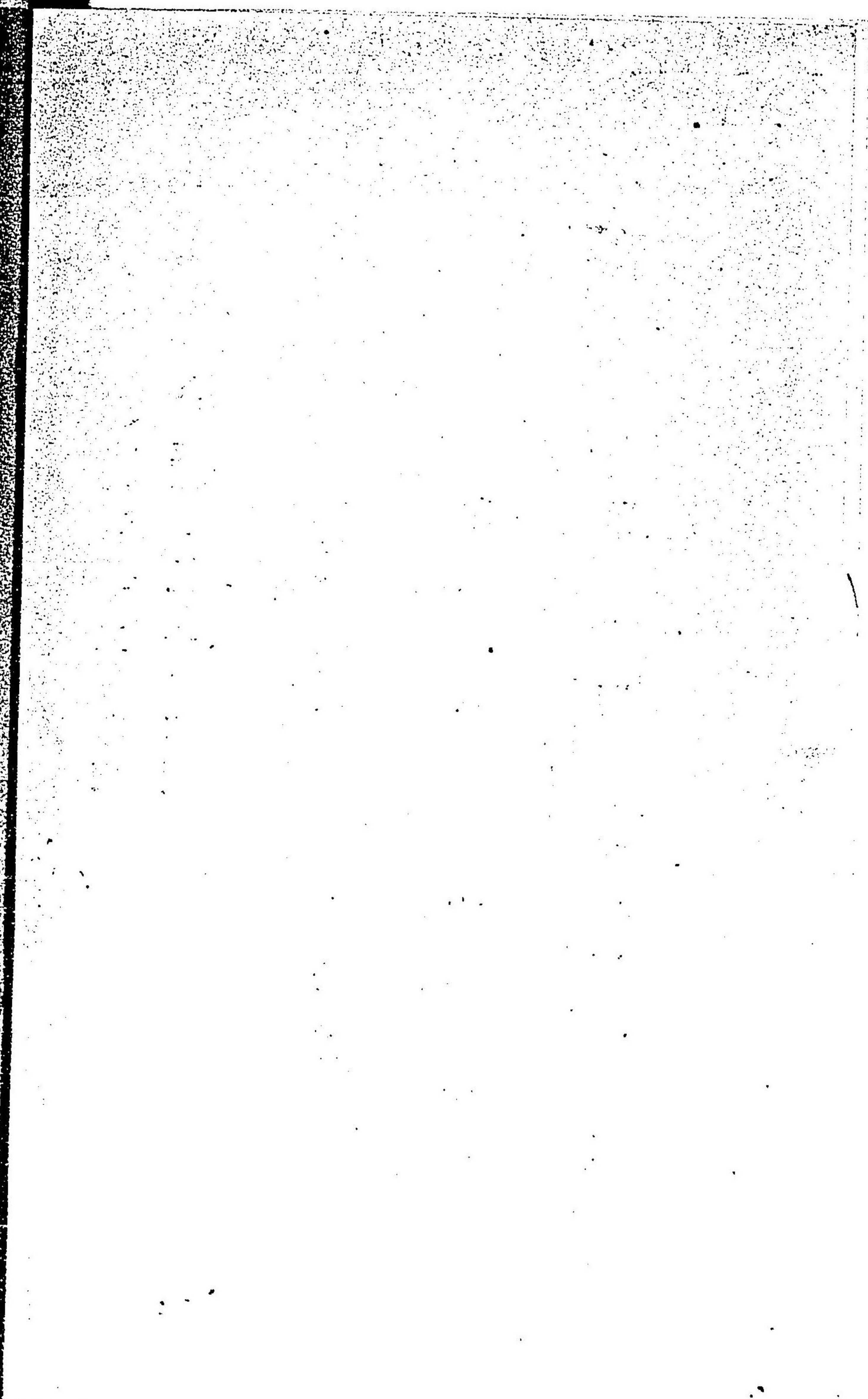
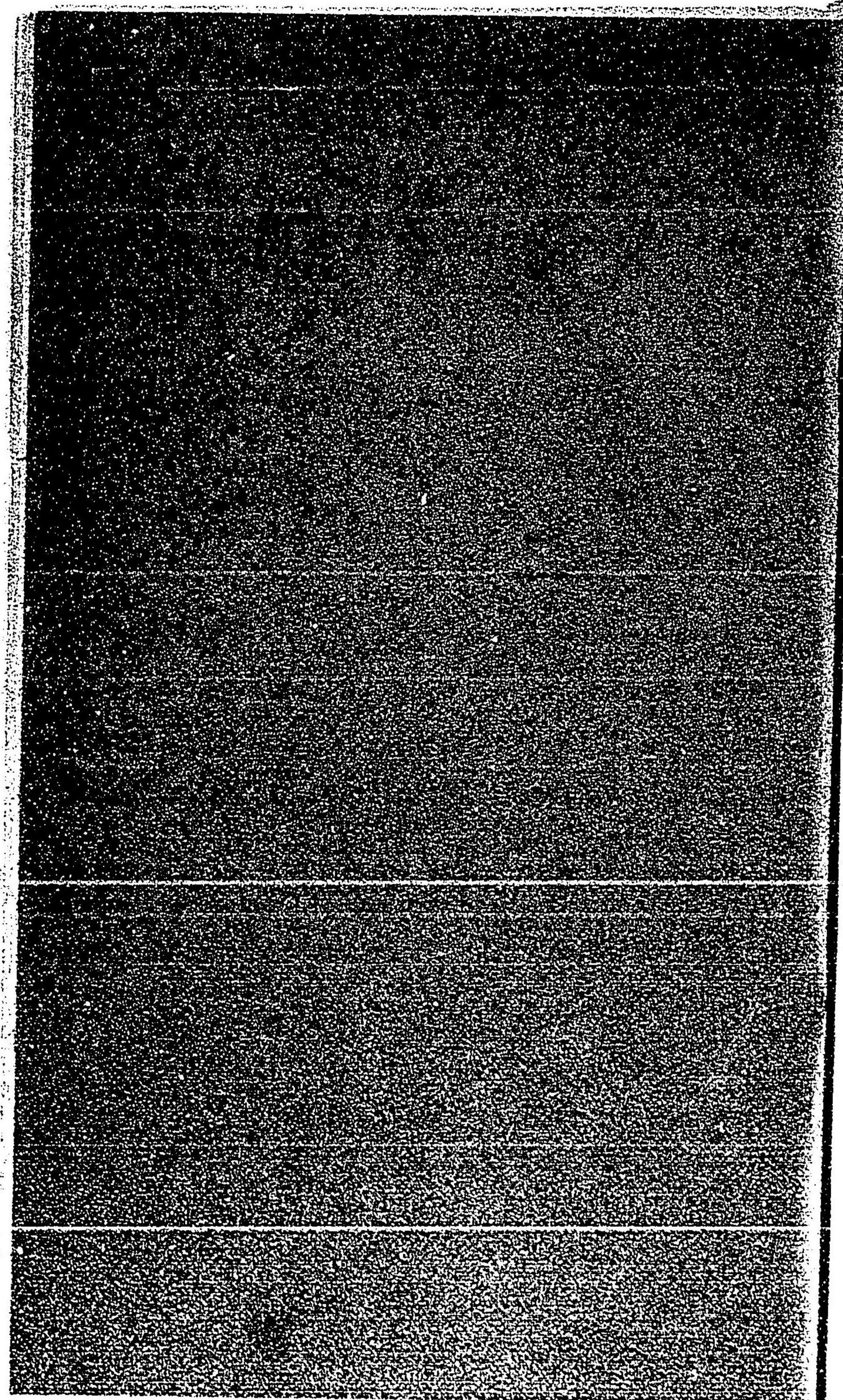
印刷人

吉賀半助

山口縣吉敷郡山口町大字道場門前町

印刷所

協同印刷會社



# 本書ニ就テ一言ス

我山口ノ地元來名所古跡ニ乏シカラス隨テ遊歴ニ來ルモノ甚少シトセス然ルニ其ノ行路伴ト頼ムベキモ即チ本書ノ如キモノアルナシ是レ編者ノ夙ニ遺憾スル所ニシテ多年ノ見聞ヲ記シ爰ニ鴻城志ノ一書ヲ編ム所以ナリ曩ニ卷上ヲ發シ大ニ世人ノ好評ヲ得テ今又爰ニ卷中ヲ出版セリ乞フ幸ニ

明治廿五年六月

編者識

鴻城志

引用書目之二

德万伊助氏日記

龍泉寺傳記

大内家古實類書

大内系譜

和漢音譯書名字考

續本朝通鑑

山口縣史略

風土記

古今鍛冶銘書

古今名公古筆

西國太平記

狂歌拾遺三栗集

斯文源流

書畫必携名家全書

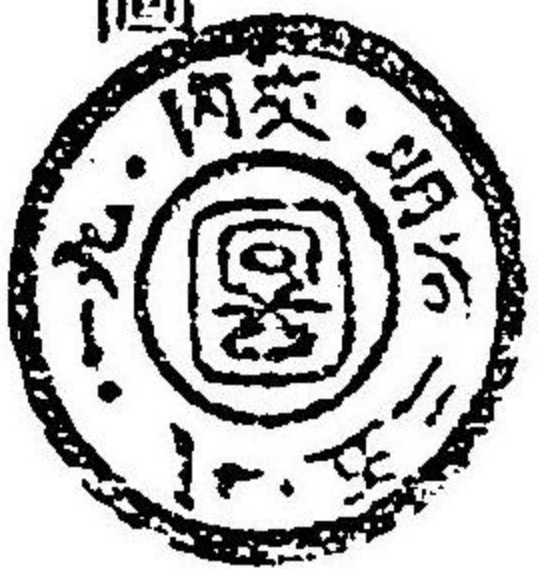
元就公記

毛利氏畧系

善福寺傳

節用集

大江姓系圖



老葉集

内藤氏系圖

御系圖(毛利氏)

燕居漫錄

銀臺遺事

百人一首千代の春

千歳和歌集

杉氏系圖



鴻城志卷之中目次

(四四)	山口町	(四五)	毛利氏世系
(四六)	二王氏	(四七)	大内氏十本杉黨
(四八)	四豪家	(四九)	南村梅軒
(五〇)	井上靈叟	(五一)	宗訊
(五二)	宗碩	(五三)	勝間蘭葩
(五四)	可山	(五五)	其音
(五六)	羽羽	(五七)	其宥
(五八)	龜卜	(五九)	蘭丈
(六〇)	緩里	(六一)	弘法大師
(六二)	尊觀上人	(六三)	其阿上人
(六四)	智淵房慶乘	(六五)	明星尼

(六六)	藤原親感の歌	(六七)	古塚
(六八)	七墓	(六九)	四町
(七〇)	四市	(七一)	七畑
(七二)	高嶺	(七三)	金華山
(七四)	九埵	(七五)	鯖埵(九埵の一)
(七六)	千切埵(全上)	(七七)	鎧ヶ埵(全上)
(七八)	陶埵(全上)	(七九)	大埵(全上)
(八〇)	オヅミ埵(全上)	(八一)	萩埵(全上)
(八二)	篠目埵(全上)	(八三)	仁保埵(全上)
(八四)	黒小路埵(全上)	(八五)	茶木原
(八六)	重石	(八七)	ワク石
(八八)	鸚鵡石	(八九)	千瀧
(九〇)	鬼ヶ洞	(九一)	笠掛ヶ原

- |       |        |      |        |
|-------|--------|------|--------|
| (九二)  | 天狗の羽衣岩 | (九三) | 雨籠石    |
| (九四)  | 大内家の寶器 | (九五) | 雪舟椀    |
| (九六)  | 善福寺    | (九七) | 四ヶ所關屋跡 |
| (九八)  | 四井     | (九九) | 搦井     |
| (一〇〇) | 水牢     |      |        |

鴻城志卷之中

(四四) 山口町

佐々木宇一編

往古ハ宇野令村の内よて慶安二年の文書に全村の附名ヲ見ヘ元祿十二年の帳簿に山口町とありて宇野令村の枝村とあり風土注進案に山口街とあり明治十二年郡區名改正の際更らに山口町と名稱を附したるものあるが古くより井然たる市街を爲せしことハ更に言ふ可くもあらざ西國太平記卷一よ曰く

山口ノ町ヲ浴中ニ准ラヘ一條ヨリ九條マテノ名ヲ移シケレハ其頃一條ノ辻ニ落書アリ

大内トハ目出度名字今ソシル裏ノ略セシ大内裏トハ

斯ク榮華ヲ究メ給ヒ云々

一條通とハ今の伊勢小路筋、二條通とは今の石原小路筋、三條通とは飯田町筋、四條通とは女郎屋町筋、五條通とは新馬場町筋、六條通と

は今の新丁筋、七條通とハ今小路筋、八條通とハ御局小路筋、九條通とハ新町筋を言ひて東は金古曾町の直達橋を限り西ハ道場門前町を堺とし南ハ鰐石川より北は木町橋迄をもつて洛中に比せりといふ

(四五) 毛利氏世系

毛利氏姓始出雲臣後改ニ土師臣又土師連、土師宿禰、大枝朝臣、大枝又改ニ大江、又稱ニ松平

○天穗日命 天照皇大神第二子也

- 二世 武夷鳥命
- 四世 神狹命
- 六世 櫛日命
- 八世 櫛田命
- 十世 也毛呂須命
- 十二世 甘美乾飯根命
- 十四世 野見宿根命
- 三世 伊佐我命
- 五世 櫛懸前命
- 七世 櫛懸島海命
- 九世 知理命
- 十一世 阿多命
- 十三世 鷺鷥濡淨命

謂ニ土師臣

- 十五世 若古足尼命
- 十七世 身臣
- 十八世 大會婆連
- 二十世 首連
- 廿二世 身連
- 廿四世 祖曆
- 廿六世 諸士
- 廿七世 本主
- 廿八世 音入
- 十六世 布須臣
- 十九世 小鳥連
- 廿一世 八島連
- 廿三世 毛受
- 廿五世 和曆

正六位上◎延暦九年十二月以ニ桓武天皇外戚故ニ改ニ土師姓ニ爲ニ大枝朝臣ニ備中介 正六位上

實阿保親王第一子 文章生 備中目 少内記 大内記 東宮學士

次侍從 民部少輔 修理東大寺大佛長官 文章博士 左少辨 丹波守

式部少輔 右中辨 左中辨 右大辨 參議 播磨守 左大辨 美濃守

勘解由長官 近江權守 左衛門督 使別當 從三位 清和天皇侍讀

号江相公◎貞觀八年十月十五日奏請改ニ大枝ニ爲ニ大江◎元慶元年十一月三日(或十三日)薨六十七歳 撰ニ群籍要覽、弘帝絶、貞觀格式

廿九世 千古チナフル

民部丞 藏人 加賀守 刑部大輔 伊豫權守 從四位下 醍醐天皇侍讀  
●延長二年二月二日(或延喜二年五月廿九日)卒年五十九

三十世 維時

文章生 藏人 美濃大掾 近江權大掾 式部大丞 昇殿 大學頭  
文章博士 備後介 紀伊權介 式部少輔 參河權守 備前守 式部大輔  
東宮學士 左京大夫 美濃守 參議 近江守 伊豫權守 中納言  
從三位 贈從二位 号江納言 醍醐、朱雀、村上三代侍讀 ●應和二年六  
月七日薨年七十六

三十一世 重光

三十二世 匡衡

右京大夫 式部大輔 從四位下 ●寬弘七年卒  
文章生 越前權大掾 右衛門權大尉 使宣旨 甲斐權守 彈正少弼  
文章博士 次侍從 尾張權守 式部權大輔 越前權守 東宮學士  
昇殿 式部大輔 丹波守 侍從 正四位下 一條、三條二代侍讀  
●長和元年七月十六日卒年六十

三十三世 舉周タカチカ

文章得業生 播磨少掾 式部少丞 文章博士 木工頭 式部權大輔  
昇殿 大學頭 和泉守 從四位下 後一條侍讀

三十四世 成衡

三十五世 匡房

大學頭 信濃守 從四位上  
文章得業生 丹波掾 治部少丞 式部少丞 東宮學士 藏人

中務大輔 左衛門權佐 右少辨 備中介 防鴨河使 美濃守 左中辨

備前權守 式部大輔 左大辨 勘解由長官 周防權守 參議

越前權守 權中納言 太宰權帥 大藏卿 正二位 号江師 後三條、

白河、堀河三代侍讀 ●天永二年十一月五日(或十五日)薨年七十一

初匡時 大學頭 肥後守 式部權大輔 正四位下

式部少輔 從四位上

實藤原光能子 明經生 縫殿允 少外記 安藝權介 因幡守 明法

博士 左衛門大尉 使宣旨 兵庫頭 掃部頭 大膳大夫 陸奥守

正四位下 入道覺阿 ●領三相模國愛甲郡毛利莊 ●嘉祿元年六月十日

卒年七十八(或八十三)

四郎 左近大夫 藏人太夫 從五位下 入道覺阿 關東評定役 ●因

地始稱三毛利氏 寶治元年六月五日戰三死鎌倉

藏人 左近將監 從五位下 入道寂佛

四郎 修理亮 刑部少輔 從五位下 入道了禪 六波羅評定衆 ●領

越後國佐橋莊南條、越州吉田莊、河內國加賀田鄉 ●曆應四年七月六

日卒

三十九世 季光

四十世 經光

四十一世 時親

三十六世 維順コレノチカ

三十七世 維光

三十八世 廣元

四十二世 貞親 次郎 右近太夫將監 從五位下 入道朝乘 ● 觀應二年正月卒  
孫太郎親茂 備中守 陸奥守 從五位下 入道資乘 ◎ 領安藝國吉

四十三世 親衡 田庄 ○ 桂氏、坂氏、光永氏、口羽氏、有富氏祖 ● 永和元年八月卒  
少輔太郎師親 右馬頭 從五位下 入道元阿 ○ 厚母氏、麻原氏、門田

四十四世 元春 氏、長屋氏、平佐氏、小山氏、福原氏祖 ● 康曆三年卒  
龜若丸 治部大輔 ● 至德三年戰死 薨州

四十五世 廣房 初之房 備中守 右馬頭 入道淨濟 ● 永亨八年卒年五十三 法名普  
光院淨濟

四十六世 光房 初熙房 少輔太郎 治部少輔 備中守 ● 寬正五年二月五日卒 法名  
大通院大樹光茂

四十七世 熙元 松壽丸 少輔太郎 治部少輔 ● 文明八年五月廿八日卒三十三歲 法  
名廣修寺月江常澄

四十八世 豐元 千代壽丸 少輔太郎 治部少輔 ● 永正三年正月廿一日卒年二十九  
法名悅更常喜

四十九世 弘元 幸千代丸 少輔太郎 ● 永正十二年八月廿五日卒年廿四 法名秀岳常松  
幸松丸 大永三年七月十五日卒年九(或十一) 法名明巖紹光

五十世 興元 實弘元子 少輔次郎 治部少輔 右馬頭 陸奥守 從四位上 贈從  
三位 贈正一位 仰德大明神 豐榮神社 ● 元龜二年六月十四日卒 安藝

五十一世 幸松丸 國高田郡吉田莊郡山城 七十五歲 法名日賴洞春  
少輔太郎 備中守 大膳大夫 從四位下 ● 永祿六年八月四日卒 安藝

五十二世 元就 國高田郡佐治部 年四十一 法名華溪常榮  
幸鶴丸 少輔太郎 左衛門督 右馬頭 侍從 參議 權中納言

五十三世 隆元 從三位 入道幻菴宗瑞 列清華 ● 寬永二年四月二十七日薨 長門國  
萩 七十三歲 法名天樹院雲巖宗瑞

五十四世 輝元 松壽丸 藤七郎 長門守 右近衛權少將 侍從 從四位下 ● 將軍秀  
忠賜松平稱号 爾來稱之 ● 慶安四年正月五日卒 萩五十七歲 法名

五十五世 秀就 大照院月澗紹澄  
千代熊丸 大膳大夫 侍從 從五位下 ● 元祿二年四月十七日卒 江戶

五十六世 綱廣 麻布邸 五十一歲 法名素巖院清高亮安  
元千代丸 長門守 侍從 從四位下 ● 元祿七年二月七日卒 江戶櫻田

五十七世 吉就 邸 二十七歲 法名壽德院大光元榮  
初主膳就勝 大膳大夫 侍從 從四位下 ● 寶永四年十月十三日卒 江

五十九世 吉元

戶櫻田邸三十五歲 法名青雲院徹山道照  
實毛利綱元男 初右京大夫元倚 民部大輔 長門守 侍從 從四位下  
●享保十六年九月十三日卒 江戶麻布邸五十五歲 法名泰桓院仰岳淨高

六十世 宗廣

初維廣 左澤百合助 大膳 大膳大夫 侍從 從四位下 ●寬永四年二月四日卒 年三十五歲 法名觀光院天倫常澤

六十一世 重就

實毛利匡廣子 初元房 匡敬 岩之允 甲斐守 大膳大夫 式部大輔 侍從 左近衛權少輔 從四位下 ●寬政元年十月七日卒 防州三田尻 享年六十五 法名英雲院祐山如靖

六十二世 治親

初德元 治元 岩之允 壹岐守 大膳大夫 侍從 從四位下 ●寬政三年六月十二日卒 江戶櫻田邸三十八歲 法名容德院仁山應壽

六十三世 齊房

初維房 義二郎 大膳大夫 侍從 從四位下 ●文化六年二月十四日卒 江戶櫻田邸二十八歲 法名靖泰院澹雲如祥

六十四世 齊熙

實治親子 初熙成 憲熙 保三郎 大膳大夫 民部大輔 中務大輔 侍從 左近衛權少將 從四位下 ●天保七年五月十四日卒 江戶葛飾邸五十四歲 法名清德院天安道寧

五世 齊元

實重就男親著子 初房昌 教元 豐之允 彈正 式部 式部大輔 宮内大輔 大膳大夫 侍從 左近衛權少將 從四位下 從四位上 ●天保七年九月八日卒 年四十三歲 法名邦憲院慈峯具秀

六十六世 齊廣

實齊熙子 初崇廣 保三郎 修理大夫 大膳大夫 侍從 左近衛權少將 從四位下 ●天保七年十二月廿九日卒 江戶櫻田邸二十三歲 法名崇文院天常端誠

六十七世 敬親

實齊元子 初敬明 慶親 猷之進 大膳大夫 左近衛權少將 侍從 左近衛權中將 參議 權大納言 從四位下 從四位上 從三位 從二位 贈從一位 ●明治十四年三月廿八日卒 于山口 神葬上宇野令村字香山

六十八世 元德

實毛利廣鎮子 初定廣 縣尉 廣封 長門守 侍從 左近將 權少將 參議 從四位下 從三位 正二位 公爵 貴族院議員

(四六) 二王氏

山口の人世々各工を以て著はるいま古今鍛冶銘畫に載するものを出だす○清真。龜山院、文永、建治、弘安の頃の人○清平。清真の子にして弘安の頃の人○清綱、清長ともに清平の子として正應の頃の人○

清綱。清綱の子として正和の頃の人○清綱。清綱の子にして元徳の頃の人○清景、清忠ともに清綱の子にして正安より元徳の頃までの人○政清。清景の子にして元亨の頃の人○清政、清吉ともに政清の子として歴應の頃の人○清仲。清政の子にして貞治の頃の人○清重。清仲の子にして至徳の頃の人○正清、清行ともに清重の子にして應永の頃の人○一清。清行の子にして正永より久安の頃までの人○清介。一清の子にして寶徳より文明の頃までの人あり

(四七) 大内十本杉黨

大内氏代臣に杉を唱ふるもの十人あまて威嚴ともよ昌んかるとし世に之を大内十本杉黨と呼ぶ

杉彈正 杉森下野 杉岡民部 上杉主水 杉下主馬 杉田豊前

杉山三右衛門 杉尾兵部 杉本藏人 杉谷作右衛門

これと漢音譯書言字考卷十に見ゆる所代氏名あり

(四八) 四豪農

大内氏の頃四豪農と呼ばれしものハ平井の是國、朝田の方子方、官野の乗近、吉敷の嶺村といへる家ありとといふ或云嶺村ハ今の宗村ありと

(四九) 南村梅軒

名知れど離明翁と号す土佐の人なりといふ吉敷郡上宇野令村白石に居る天文年中始めて朱氏學を唱ふ世に南學と稱せりといふ、近藤清石云義隆朱氏新注五經以朝鮮に求むる蓋梅軒が誘導せしぬるべし(大内氏實錄)

斯文源流に曰く

土佐國に南村梅軒といふ隱者あり其出所何國の人といふことを知らず疑殆らくと大内家の遺老あらん歟と云傳陸朱氏の學を以て人に授く云々(以上本文)  
黒川道祐、名玄逸、字道祐、名梅林と号す初蓬瀛儒醫南村梅軒(以上頭註)

(五〇) 井上靈叟

名は玄徹、字は靈叟、本姓ハ田谷、周防山口の人其先は大内家の族たり延壽院玄朔の門に入て醫と學ふ東福門院診し効ありて交泰院法印を賜ぬ貞享三年四月十九日卒す年八十五(書畫必携名家全書)

(五一) 宗訊

山口の人、俗稱ハ友弘、大坂にいたり牡丹花宵柏の門に入て連歌を巧にすと書畫必携名家全書に見ゆ

(五二) 宗碩

月村齋と号し宗祇の門人にして連歌を修しまた和歌を能く此の地よ來りて作る所おも亦少とせす

(五三) 勝間蘭葩

名ハ是伯、山口道場門前町に住して醫を業とす詞藻に富み兼て書を能くす著す所山口葉あり

(五四) 可山

通稱と安部平右衛門と稱し山口道場門前町の巨商たり老て後ら上宇野令村字糸米の別墅に居り専ら俳諧と樂む

(五五) 其音

山口の藩士にして通稱を羽仁寛と稱し俳諧を能くす

(五六) 羽羽

姓は田中名は俊藏後ち助兵衛と改む羽羽ハ其号にして俳諧を能くす

(五七) 其宥

通稱を岡要助と稱し山口道場門前町に住し俳諧を能くす

(五八) 龜卜

山口米屋町の人にして通稱を伊藤重三郎と稱し俳諧を能くす

(五九) 蘭丈

通稱は竹下安右衛門、山口道場門前町の人俳諧を能くす

(六〇) 緩里



山口道場門前町に住し刀劔を商とて通稱ハ江川善助俳諧を能く

(六一) 弘法大師

延暦二十三年入唐し大同元年歸朝の日山口に來り一寺を創建し一月許にして京に上ると龍泉寺の傳に記す大師果してこの地に來りしや未だ他に證を得ざ

(六二) 尊觀上人

龜山天皇の皇子恒明親王の子かり遊行十二世にして諸國化導の日この地に來り善福寺に中興とありのち赤間關に薨す

(六三) 其阿上人

内藤左衛門太夫隆春の子(内藤氏系譜にハ見へず)にして始め大一庵(又大智庵とも呼ぶ)と稱し善福寺十二世を繼て其阿上人と稱す連歌に妙を得てまた書を能くは古今名公古筆に

山口連歌師 其阿 尊圓流

とあるも此即ちこれ人なり

(六四) 智淵房慶乘

慶乘は其先藤原秀郷よる出て十世小川左衛門尉時村丹波國を領す慶乘は其裔みして祖父を新右衛門尉通常ハ毛利洞春公に仕へて長門國豊田郡麻生を領し父孫右衛門尉通長は文祿元年朝鮮の役蔚山にて戦死す慶乘初め長藏通春と稱す幼にして永上山の別當光祐法印の弟子とかり止觀の窓よ心を澄し修學に功成つて師坊より智淵房の号を與へらる曾て比叡山勅會に堅義に撰はれて法印權大僧都に叙せられ後ち清光夫人の命により淨土眞宗に歸して寛永七年矢田村より一字を創建し明應山光圓寺と号し其開山と爲る

(六五) 明星尼

大内持盛の息女にして始めれ名を春日と呼び平井次郎判官貞盛に嫁す貞盛の豊後で戦死するや京に上りて蓮如上人の弟子となり剃髮し

て明星尾を稱し後より歸國して平井村に住し文明十三年大内政弘卿に請ふて姫山に西麓に一寺を建立し延立寺を號す今の讚井町の圓龍寺こそきかり永正十年十月朔日卒す壽八十五歳

(六六) 藤原親感の歌

千歳和歌集卷九よ出づ

周防に父の罷り下り来るう彼國にて身まのりにけると聞て

藤原親感

まづらんと思は、いかよ急がまし跡を見らたよ迷ふ心を

(六七) 古墳

上宇野令村梅峯に瀧の上路邊にあり俗に公家の墓かりやいひて疇昔は通行人拜と爲して過ぎけりと

或云むかしはこれ塚じるしに大松ありしが先年幻松院の玄貞和尚(後大樂寺、隱居して瑞雲と号す)これ松を伐りて眼を病み終身癒へざまた堅田安房守家來山形藤左衛門この松根を掘るとて眼球を脱

出したることをあまじ

(六八) 七墓

往昔七墓廻りとして鉦をうちて巡拜とることありし其箇所ハ

上宇野令村字畑、大藏山の麓、古堂

全村字古熊、宇野河原

全村全字、周慶寺河原

全村全字、鰐石橋の上

山口鰐石町の裏(一説にハ上宇野令村字天花七尾山といふ)

宮野村字宮野河原、草ツケ○後ち全字山崎へ移す

矢原村字大曲、千日原(又稱眞清原)

七墓廻りのこと獨り此地にかざらざ狂歌拾遺三栗集秋の部よ百草の露ふみ分けて松虫のかねをふよりに廻る七墓

(六九) 四町

曰く大市、曰く中市、曰く米屋町、曰く道場門前町

(七〇) 四市

曰く黒川市、曰く矢田市、曰く氷上市、曰く仁保市、これ古くより呼ぶ所なり

(七一) 七畑

曰く上宇野令村の天花畑、曰く御堀村の大内畑、曰く吉敷村に吉敷畑、曰く下小鯖村に宇津木畑、曰く宮野下村に法明院畑、曰く全村の東畑、これなり而して天花畑ハ古くハ雲ヶ畑と唱へしといふ

(七二) 高峰

上宇野令村にありてまた鴻嶺に作り或は伊勢山と稱し高さ十三町あり日本風土記に曰く此山險而諸木茂と宜かり要害堅固にして築城の地に適したること弘化二年春大内義

長毛利氏の兵を防がんか爲めにこゝに築城し未だ功を竣らざるよ全三年毛利兵の攻むる所となり終り利あらざして長府に奔る

毛利氏之を奪ひて城番に市川伊豆守經好、南方宮内、大庭加賀守、兒玉周防守、全但馬守を置く

永祿十二年冬十月大内太郎左衛門尉輝弘、大友氏の兵を率ひて九州より來り之を圍む、時に城番市川經好毛利氏に九州に従軍してあらざり其妻某士卒を指揮して拒戦す日あらざりて援軍到り輝弘の軍潰へて走る

元和元年閏六月(或十二月二日)諸國の古城破却すべき幕令ありこの城もまた廢せらる

この城に道七筋ありて大路、大谷は大門の段に出る糸米ひらに。笹ヶ谷、風呂ヶ谷ハナメラびらに。岩戸道、求聞持道は前面よ。下カ谷ハ瀧の上にある(大内家古實類書)

この城水に乏し故に在城の人々求聞持谷の水を汲きて用ひたりといぬ。井は天守に一ヶ所、求聞谷の向ふ道の上よは堀貫きの井一ヶ所、白石の上、筒井の壇に一ヶ所あれども之ハ用ゑるに足ざりしにや(全上)寛政七年奈川仁右衛門檢分として城址に取調をさせり其摘要ハ○本丸、詰の丸また天守をいふ此壇竪二十六間横十三間川石の礎及び四方の大石垣を存す○南本丸○毛拔堀○馬乗馬場○五兵衛が壇○大門の壇○兼重丸○大道○門の跡等惣て二十一壇あり(全上)この山の名所にハ七本松の壇○鞍ヶ浴○長畠○ノロガ浴○水吞ヶ浴○求聞持の馬乗馬場○惣兵衛塚も普門寺塚とも稱す○岩戸道○求聞持谷○尻無の尾○茶木ヶ浴○銀杏谷○下の谷○雨籠石○下リ尾○大へキ等あり(全上)

(七三) 金華山

御堀村字間田にあつて一に衣笠山と稱す

天慶年中大内正恒の子康俊この山に在城す(大内家譜)  
 明應二年杉次郎左衛門尉弘相在城のこと杉氏の系圖よあり  
 風土記よ間田掃部之助に城址とあり

(七四) 九塚

曰く鯖塚、曰く千切塚、曰く鎧ヶ塚、曰く陶塚、曰く大塚、曰くオヅミ塚、曰く萩塚、曰く篠目塚、曰く仁保塚、これ俗よ山口の九塚を稱する所のものたり

(七五) 鯖塚

また勝坂を稱し山口九塚の一にして小鯖村より佐波郡右田へ越ゆる所をいふ明治十八年洞道を穿つ長と二百八十一間六歩往來の便昔日の比よあらず

(七六) 千切塚

山口九塚の一よして小鯖村と本郡切畑村へ越ゆる所をいふ

(七七) 鎧ヶ埜

山口九埜の一にして平井村字恆富に内山より吉敷郡陶村字畑へ越ゆる所をいふ井上就貞の碑銘に衆寡不敵戦死鎧ヶ埜とあれども別な説あり

岩に藤からむ鎧の埜か

山口 壺外

(七八) 陶埜

ほた糸根埜と稱す山口九埜の一にして平井村字平野より吉敷郡陶村此字糸根へ越ゆる所をいふ

永祿十二年大内輝弘豊後國より吉敷郡秋穂の浦に着船し山口へ進入のときこの埜よて合戦す其戦死者を葬りしもの松原の中より千人塚ありまた或人いふ其邊りある四十九ヶ原に古墳十五ありサイガ原に全十三あり全しくこの埜よて戦死者を葬りしものからんと

(七九) 大埜

山口九埜の一にして吉敷村より美祿郡大田伊佐等へ越ゆる所をいふ陰徳太平記卷十九、後太平記卷三十一、元就公記第八等に

大内義隆法泉寺ヲ出テ大坂ヲ越ヘ云々

やある大坂はこの大埜を誤れるなるべし

(八〇) 小ヅミ埜

山口九埜の一にして下宇野令村字朝倉の河内より中尾村へ越ゆる所をいふこの頂上に御物見の壇といへる地あり傳へいふ大内義隆卿が日々父義興卿を墓へ参詣のときこゝに休憩の爲め亭を設けありしと

(八一) 荻埜

ほた糸米埜と稱し古へは糸井根埜ともいへり山口九埜の一にして上宇野令村字糸米より下宇野令村字朝倉へ越ゆる所なり大内輝弘の役この地にて吉川小早川の兩氏魁のことと論せると後太平記卷三十九に見へたり曰く

十月十五日ノ夕陽ニ赤間關ヲ討立給ヘハ手勢僅ニ三百餘騎ニハ過ザリケリ吉川、小早川、魁シ兵戸安藝守八百餘騎陣ニ備ヘ全十七日糸井根埜ニ旗ヲ立シ去レ共吉川小早川魁ノ論起リマハラ蒐シテ陣氣不安云々

(八二) 篠目埜

山口九埜の一より宮野村字杖坂より阿武郡篠目村へ越ゆる所をいふ

(八三) 仁保埜

山口九埜の一として宮野村より仁保村へ越ゆる所をいふ

(八四) 黒小路埜

平井村字恒富の内山より吉敷郡陶村の龍光寺へ越ゆる所をいふ

(八五) 茶木埜

上宇野令村字瀧村にあり足利義滿將軍のとき大内氏に命して城州宇治へ茶を植ゑしめらる大内氏其餘種をこの地へ蒔きたりといふ「節用集」の頭書及ひ「百人一首千代の春」の頭書に曰く

宇治茶は名物とす義滿將軍大内介に命じて植しめ給ふ其後義澄公殊に賞し玉ひて之を撰びて極と名づく云々

(八六) 重石

一よ鶴石と稱す仁保村字深野の小高野に在りて正方形に巨巖屹立すること高數丈恰も重箱と積むに似て奇觀言語に絶す

水音も高く聞へて幾巖かさねし空にかゝる白雲

半からかすひや空もかさね石

雉子の音も訝もたかし重ね石

(八七) わく石

重石の邊よやあらんか古歌あり

糸薄のたより見せよとく石も

(八八) 鸚鵡石

一よ言葉石と呼ぶ上宇野令村天花吹上山に在りこの石に向ひて語れ

は從て應ざるもの、如し故よこは名あり  
伊勢及越前よ全名の石あり共に世に聞ゆ

(八九) 千瀧

宮野村ふありや傳ふれども今何れかを知らざ高橋氏雜纂に歌あり  
五月雨に水烟ります千瀧のいと心かくしづや見るらん

(九〇) 鬼ヶ洞

宮野下村道祖埵より御堀村字氷上よ越ゆる「瓜畦」にある大石をいふ  
(九一) 笠掛ヶ原

宮野下村ふあり今初瀬の原ともいぬ大内氏の頃笠掛ヶ射藝を試し  
地ありといふ

(九二) 天狗の羽衣岩

上小鯖村字雨乞山に在り

(九三) 雨龍石

上宇野令村高嶺に南腹にあり土民こゝに至て雲舞を爲すの古俗あり

(九四) 大内家の寶器

大内家の多く珍器を藏せしことは更よ疑ふべくもあらざ後太平記卷  
十五よ曰く

吾系ハモト百濟國琳聖太子ノ末ニテ鎌倉右大將家ノ時ヨリ周防國ヲ賜ツテ三韓ノ  
ヲ司リ爾來毎年貢物八十艘ヲ受ク云々

また中國治亂記五十五丁に曰く

大内ハ代々渡唐ノ使僧ヲ遣シ綾錦ニ至ル迄家紋ヲ織ラセ大内菱トテ唐ヨリ色々ノ  
織物數千艘渡リ其外茶器唐物鑄物ツメ置タル倉モ皆此火事ニ燒失シケルヲ惜マヌ人  
ハナカリケル

嗚呼惜哉永祿の役古器珍寶多く灰燼よ屬す

千鳥の寶劍 陰德太平記よ見ゆ

荒波の寶劍 全上

鬼切丸正宗 後太平記に見ゆ

小清水の薙刀 續太平記に見ゆ

大内伽羅 築山屋形盛衰記に見ゆ

大明勘合の印 孔明聖傳、異稱日本傳、本朝軍器考、和漢三才圖

會、日本王代一覽、後太平記、中國治亂記、築山屋

形盛衰記、温故雜記、等に見ゆ

瓢箪の茶入江澤藻髮 西國太平記、陰德太平記、等に見ゆ

開運石 或記に見ゆ

七曜石 全上

金石(正觀音の像を彫り)全上

これ諸書に於て散見する所の一二あり今尙ほ幸に存するや否やまた此餘に如何なる珍器のありしを知らざ

(九五) 雪舟椀

後河原町に數百軒の椀屋あり雪舟形の椀として其間へある椀へ草木生

類其外傳來れ模様を畫けり椀の木地は石見國の上品を用ひ専ら塗と事せず此細工人東西の兩町に軒を並へて他國へ交易せり是を山口椀といふ(大内家類書)

(九六) 善福寺

山口道場門前町にあり今廢せらる、時宗にして壽持山と号し相模國藤澤清淨光寺末にして世に道場と呼ぶ町の名もこれ門前に當るを以て名づく創建を正應元年と寺傳にあれども本寺清淨光寺は之より九十七年の後元中元年十二月の創建(續本朝通鑑に據る)されば信じがたし

於善福寺八月十六日

同じ世の秋や葉替ぬ庭の松

宗碩

まら出る宿は風れ萩はか

其竹

山見れハ雲の上ふる月澄んで

杉勘解由 興道



(九七) 四ヶ所の關屋

關屋と呼ぶ地名四ヶ所あり

吉敷村に赤田 朝田村の仁保津境

小鯖村の中村 官野村の河原

思ふに關所を置きし地あるべし吉敷に國造の時が將た大内氏の頃か未だ判せざ

(九八) 四井

古書に山口に四井といへることあり蓋大内氏の頃の名からんか

高井の井 朝田村字高井八幡宮の水

平井の井 平井村字平井日吉神社の水

庄井に井 朝田村字勝井熊野神社の水

讚井の井 讚井町西裏の小池

或人云ぬ圓龍寺の井に讚井の井と銘せしことありしが偽りなりとて

取り毀らるりと

(九九) 鹽井

官野村字七房に跡あり燕居漫錄卷之上に曰く

鹽井と云て井の中よと鹽の出るあり是を常のやうよとよのへて用る也本脚漢書雜俎等に見るし云々

全上卷之中に曰く

前篇に云ひし鹽井のふと周防山口官野村龍王といふ所にあり云々

文政七年十一月十八日龍王社右車角の下溝よて半左衛門なるもの古鏡が掘出したることありと徳万伊助の日記に見へたり鹽井はこのありどもにありしにや

(一〇〇) 水卒

上宇野令村字長山猿猴橋に邊よありしといぬこい田畠の土貢が怠りたるものゝ親子兄弟と其年十二月晦日晝夜之に投ぎ、されば寒中の

ことゝて一夜を凌ぐことも難かりしといふ斯る残酷のことかりしかば何時しか廢せられたり  
肥後國細川家の領内にも水籠ありしと見へて肥後よ鳳凰紀州よ麒麟と世よ聞へしころ之を廢したること銀臺遺事に見ゆ

鴻城志卷之中終

1/10/33

明治廿五年七月一日印刷

明治廿五年七月二日出版

山口縣吉敷郡山口町大字野田町第三十番屋敷

發行兼編輯人

佐々木宇一

山口縣吉敷郡山口町大字久保小路町第二番屋敷

印刷人

吉賀半助

山口縣吉敷郡山口町大字道場門前町

印刷所

協同印刷會社

21 6P 48

山口縣吉敷郡山口町大字深屋町

元賣捌

瑞光堂書店

賣捌所

小原超世館

全

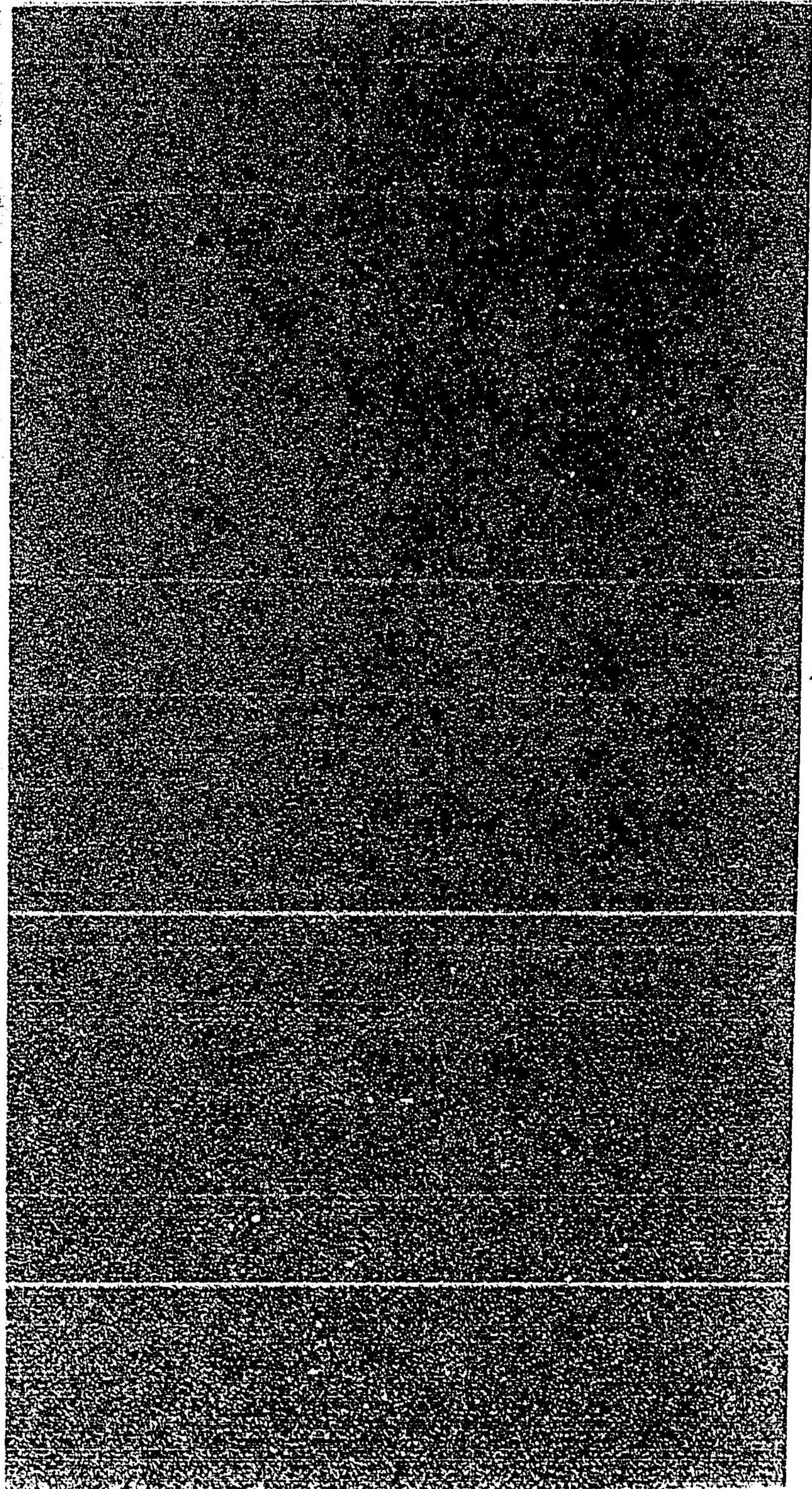
清水一二三堂

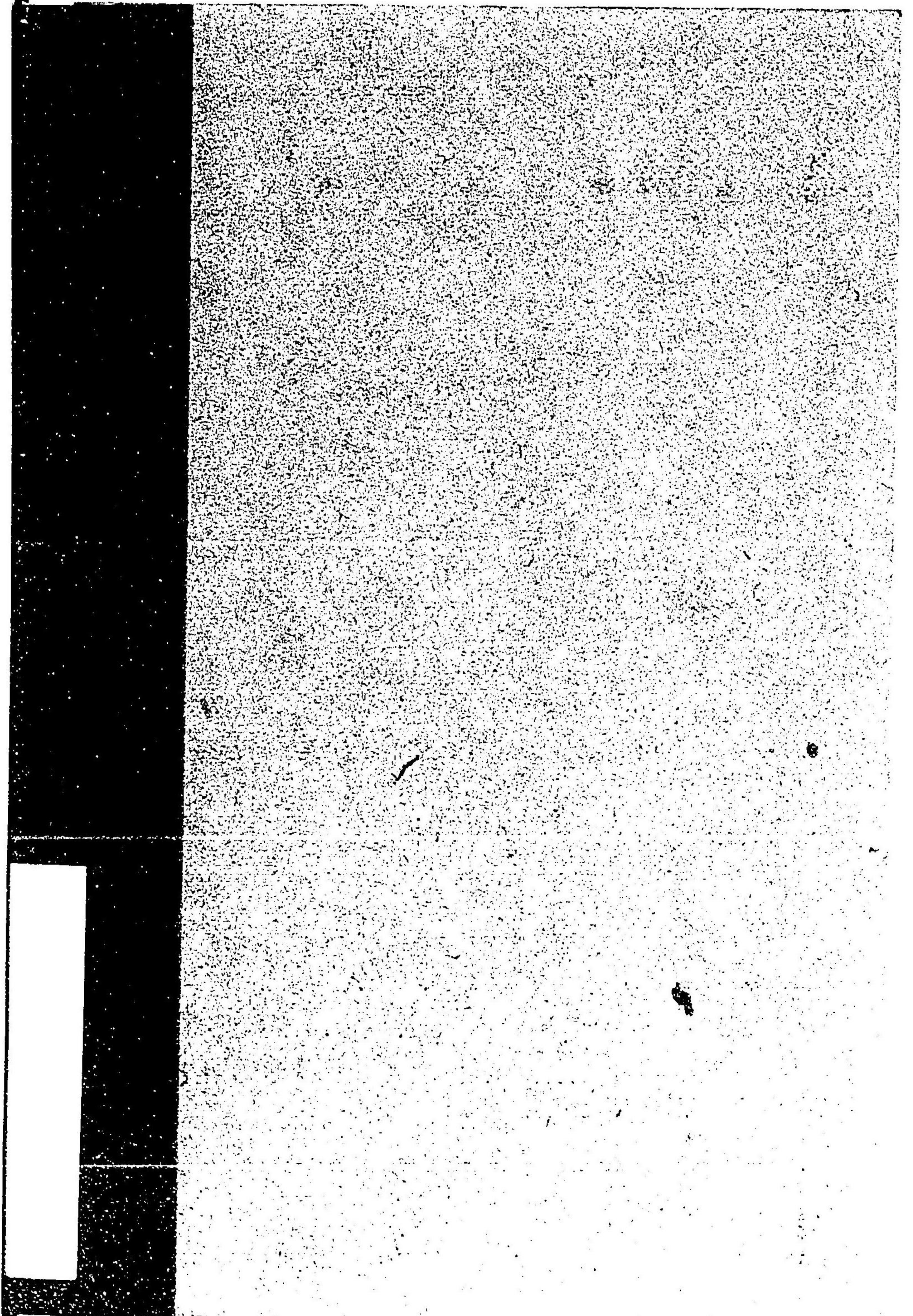
全

飯田育英堂

全

官川博古堂





鴻城志

上·中

国立国会図書館

18

303

025845-000-6

18-303

鴻城志 上, 中卷

佐々木 宇一/編

M25

ADC-3398

